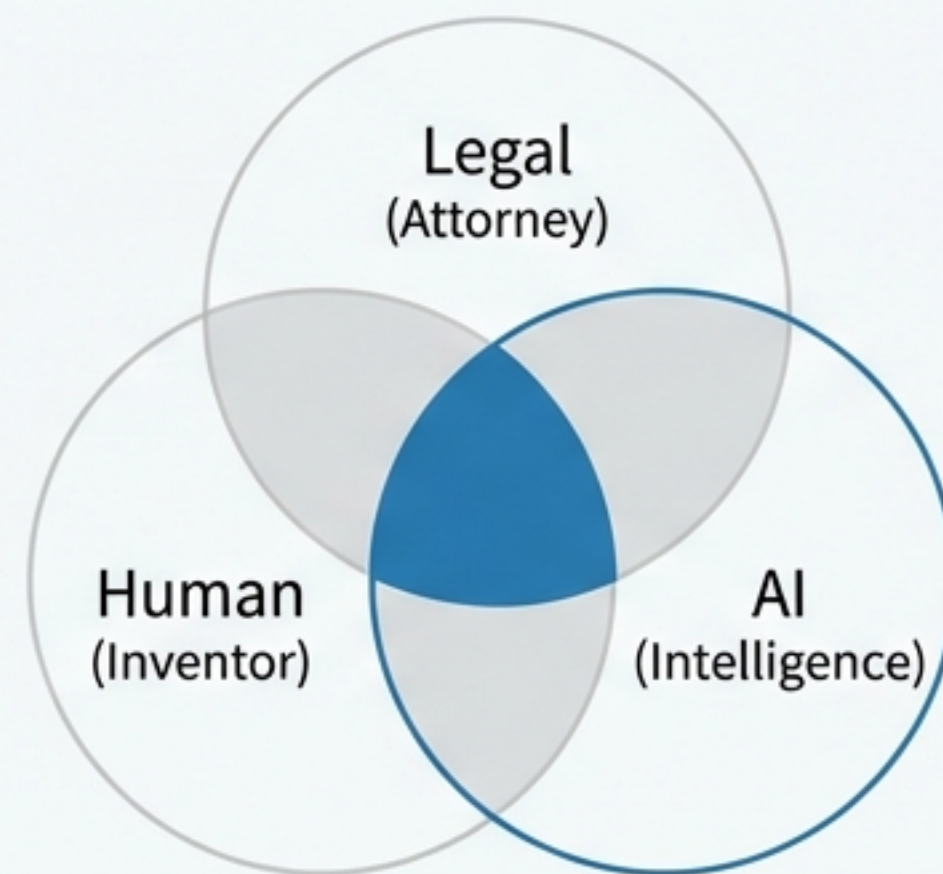


戦略的特許権取得に向けた生成AI活用

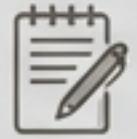
第4世代 明細書構築のための方法論

発明ヒアリングの再定義と「共創」による知財価値の最大化



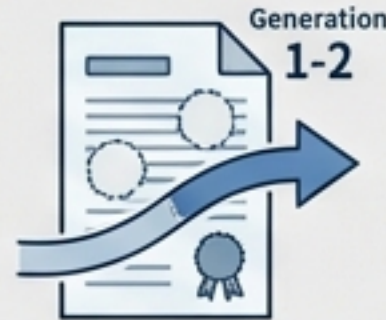
現代の知財競争において、発明ヒアリングは単なる「事実確認 (Fact Finding)」の場ではない。
生成AIを第3の参加者として迎え入れ、発明を「共創 (Co-creation)」する場へと進化させる包括的实践論。

パラダイムシフト：受動的な「転写」から能動的な「拡張」へ



従来型ヒアリング (Fact Finding)

- **Focus**
発明提案書の穴埋め、
事実確認
- **Role**
弁理士は「聴き手・代書人」
- **Result**
「穴のある」特許。
回避設計を許容しやすい
第1～2世代の品質



AI協働型ヒアリング (Co-creation)

- **Focus**
発明の拡張 (Expansion)、
論理構築、戦略的設計
- **Role**
弁理士は「ファシリテーター」、
AIは「参謀」
- **Result**
紛争抑止・完全支配型
(第4世代) の特許



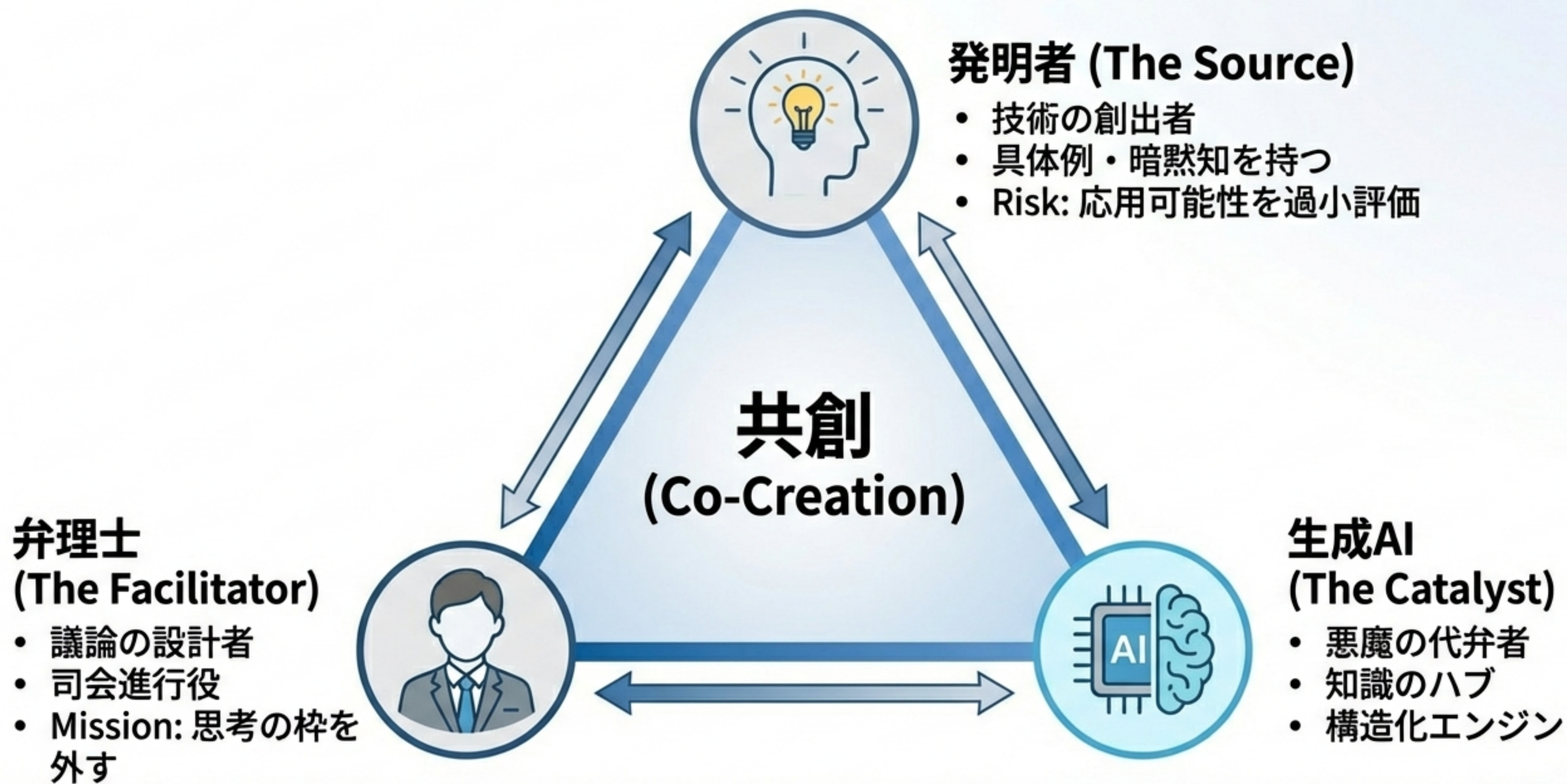
Insight: AIは単なる省力化ツールではない。人間の認知バイアスを補完し、思考の枠を広げるための戦略的パートナーである。

目指すべき到達点：「第4世代」の戦略的特許



ドラフティング技術だけでは第4世代には到達できない。
「ヒアリングの深度」こそが決定要因である。

ヒアリングにおける役割変容：AIを「第3の参加者」にする

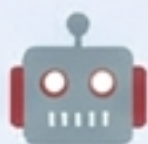


準備フェーズ①：情報の構造化と論理的欠落の特定



発明提案書の受領

事実データの抽出・確認



情報の構造化 (AI)

「事実」と「仮説」の分離
課題・解決手段の抽出



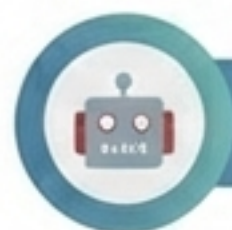
論理的欠落 (Missing Link)

- 「何が書かれていないか」を特定
- 例：効果に対し「技術的課題」が不在
- 例：解決手段に対し「具体的構成要件」が不足

戦略的価値：質問が「課題は何？」から「効果A実現のため構成B以外に必要な要素は？」へ進化する。

準備フェーズ②：仮想クレームによる権利範囲の可視化

Negotiation Zone（権利取得の交渉範囲）



Lower Limit（下限）

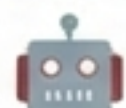
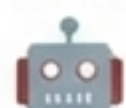
- 確実に特許可能な範囲（具体的実施態様）。



Upper Limit（上限）

- 最も広い権利範囲（独立請求項案）。
- 権利行使の容易性を重視。

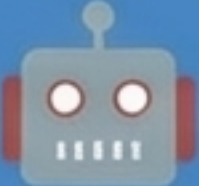
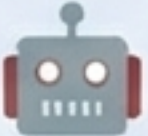
AI Prompt Strategy

-  「最も広い権利範囲を確保するための独立請求項と、具体化した従属請求項を3パターン作成せよ」
-  「権利行使の容易性（侵害発見のしやすさ）の観点から評価せよ」



定義が曖昧な用語（例：「制御部」の処理内容）を
事前に特定し、ヒアリングの最優先質問事項とする。

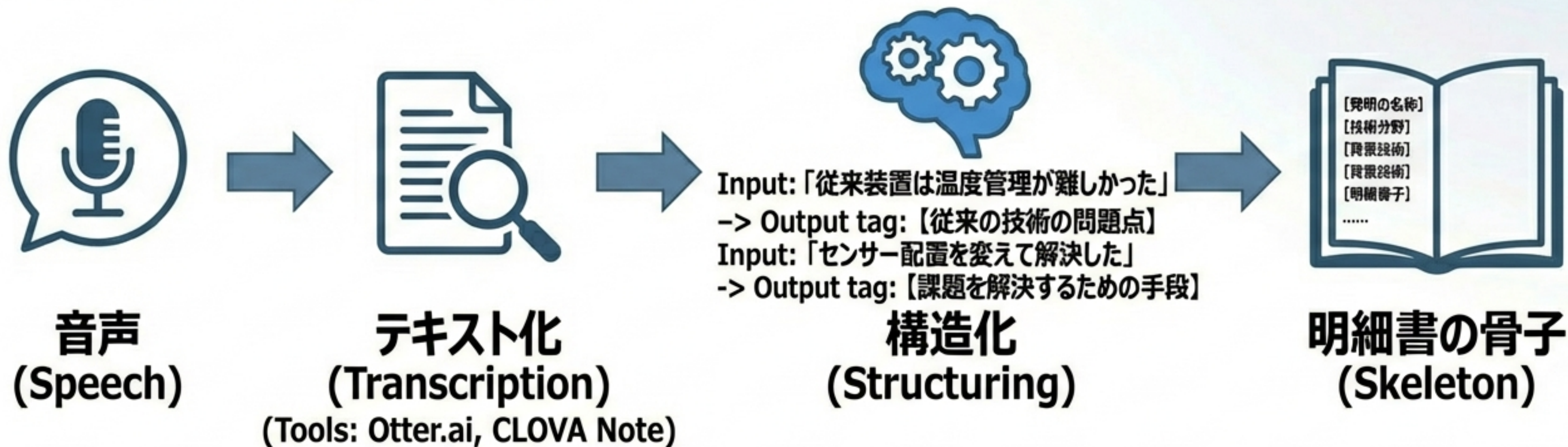
準備フェーズ③：先行技術対比と差別化ロジックの構築

Traditional Search (従来型調査)		 AI Logic Construction (AIによる論理構築)
手法	キーワード検索	意味検索 (Semantic Search) + 論理シミュレーション
目的	類似文献の発見	拒絶理由の先読みと反論構築
プロンプト 戦略		 「審査官がこれらを同一視して進歩性を否定する論理を構築すると仮定した場合、それに反論するための技術的差異を3つ提案せよ。」

戦略的価値：「この先行技術とどう違いますか？」ではなく、
「審査官はこの点を突いてきますが、反論材料として〇〇という
データはありますか？」という戦略的質問が可能になる。

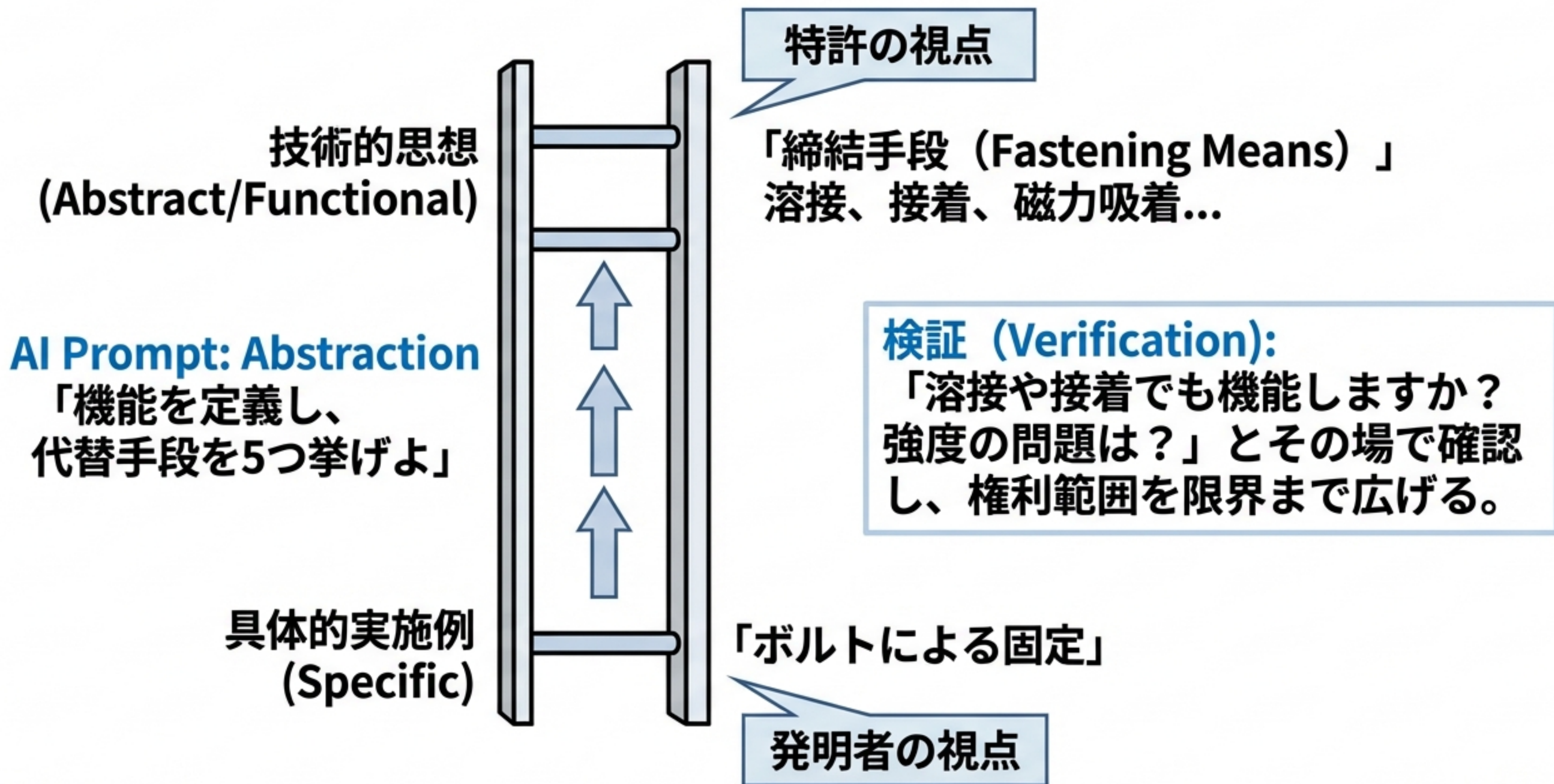
ヒアリング実践①：リアルタイム・アシスタントとしての活用

課題：弁理士は「聞く」「考える」「書く」のマルチタスクで認知負荷が限界に近い。



弁理士は「思考」と「対話」に集中できる。

ヒアリング実践②：「抽象化のラダー」による発明の拡張



ヒアリング実践③：悪魔の代弁者とインベンション・ハーベスティング

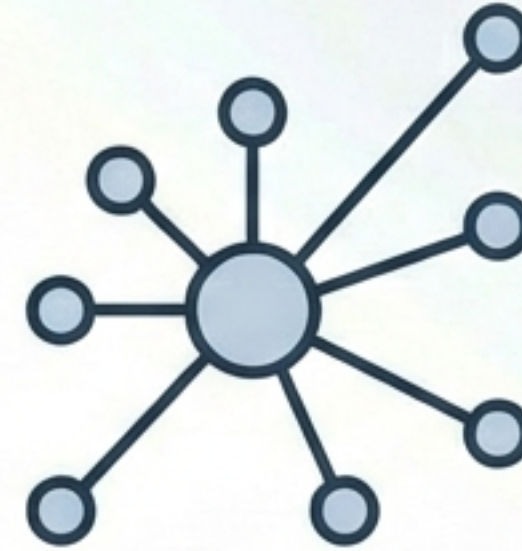
Technique A: Devil's Advocate (脆弱性テスト)



AI Role: 厳格な審査官

- 「単なる設計事項」「寄せ集め」として進歩性を否定する論理を提示。
- Effect: 発明者の闘争心を刺激し、深い技術的根拠（阻害要因、顕著な効果）を引き出す。

Technique B: Invention Harvesting (発明の発掘)



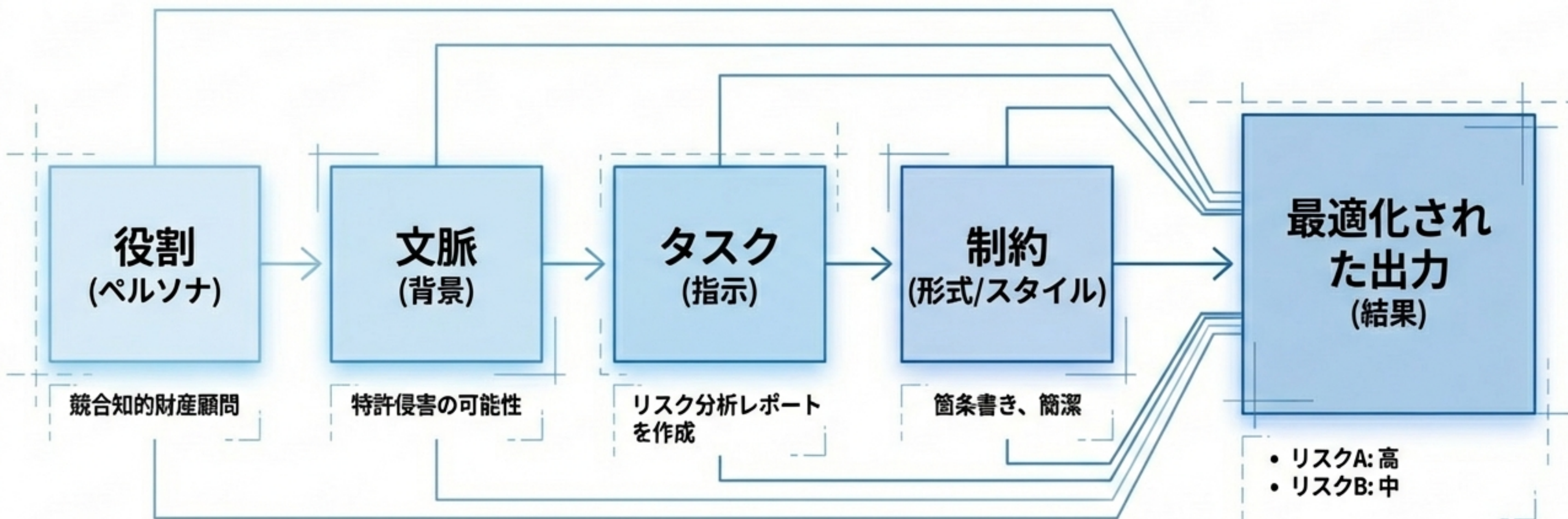
Cross-Domain: 「自動車以外の分野（医療、宇宙）への応用は？」



Supply Chain: 「完成品だけでなく、製造装置、検査方法、中間生成物も権利化」

Effect: 網羅的な特許ポートフォリオの構築。

プロンプトエンジニアリングの極意：AIを制御するフレームワーク



Advanced Technique: Chain of Thought (CoT)

「ステップ・バイ・ステップで考えて」と指示。
構成要素列挙 → 機能定義 → 相乗効果特定 → 進歩性論証という論理手順を踏ませる。

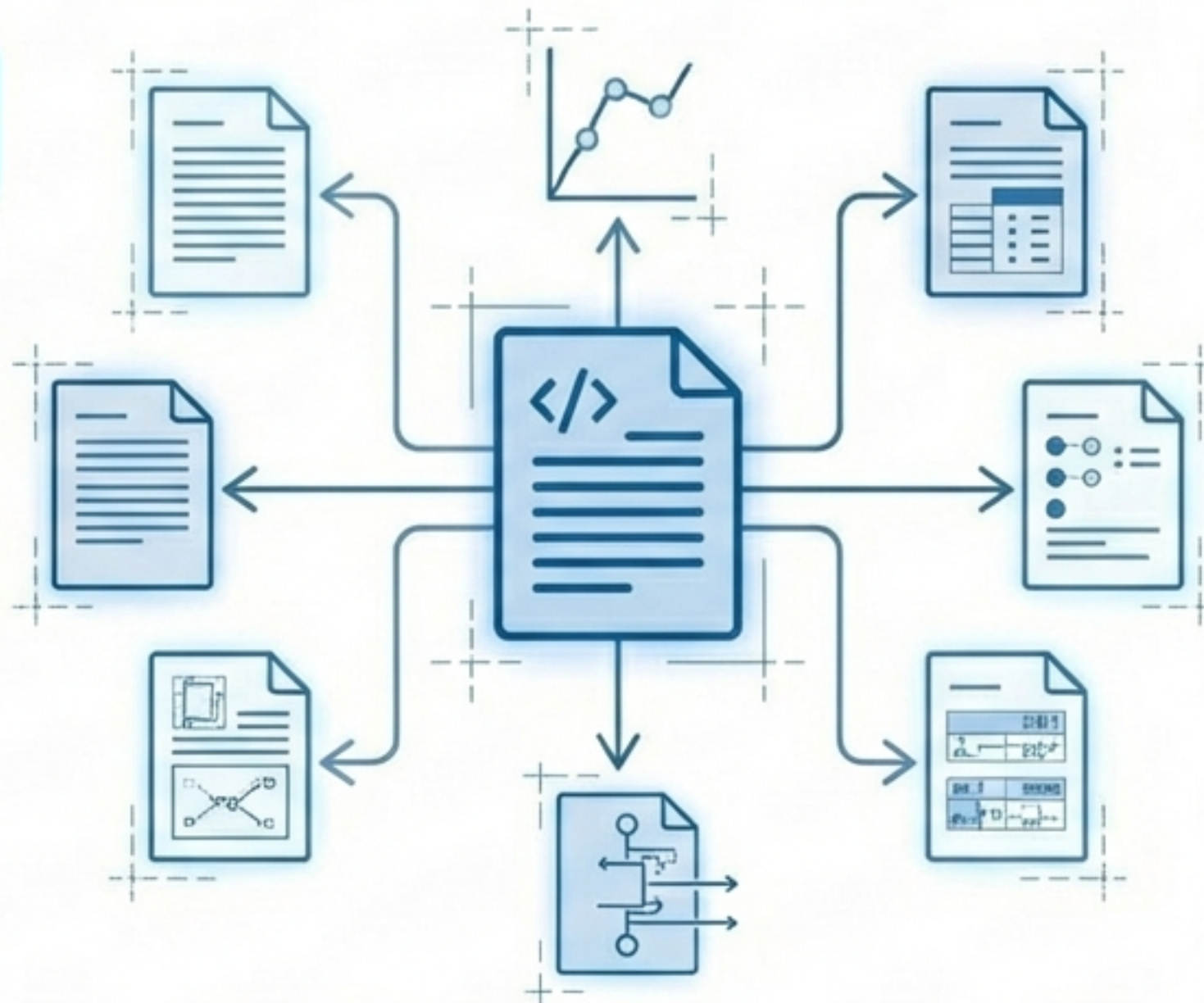
ポスト・ヒアリング：実施例の多角的展開 (Embodiment Expansion)

第4世代特許に必要な「網羅性」の担保

Method 1: Variation Generation



ヒアリングで出た代替手段を、AIが具体的な実施例として文章化・図面化。



Method 2: Numerical Ranges & Comparative Examples



「温度範囲100-200°C」の臨界的意義を説明するための「失敗例（比較例）」データを仮想的に生成提案。

Note: これらは「実験が必要な仮説」として提示し、発明者に追加実験を依頼する根拠とする。

Quality Check

 Quality Check: AIに再度「審査官」役をさせ、サポート要件・明確性要件を機械的にチェック。

ツール別活用ガイド：モデルの特性に応じた使い分け

	Strength (特性)	Use Case (活用シーン)
ChatGPT (GPT-4o)	万能型、高い推論能力	- ロールプレイ (模擬審査官)、 - アイデア出し (壁打ち) 
Claude 3 (Anthropic)	- 長文脈処理 (Long Context)、 - 論理的ー貫性	- 先行技術文献の読み込み・分析 - 明細書全体の整合性チェック 
Gemini (Google)	- 検索連携 (Grounding)、 - マルチモーダル	- 最新技術調査、図面解析 (手書きスケッチ)、 - 数値データ分析 
Specialized Tools (Tokkyo.Ai etc.)	 特許分類付与、信頼性の高い調査 (ハイブリッド運用)	

リスク管理とガバナンス：AI活用のガードレール

Security & Confidentiality



- 原則API/Enterprise版を利用し「オプトアウト」設定。
- 固有名詞の匿名化（マスキング）。「A社」「物質X」への置き換え。

Hallucination (虚偽生成)



- Human-in-the-loop: AIはあくまで「ドラフト」、最終確認は人間。
- Grounding: 回答の根拠（URL、文献番号）を必ず提示させる。

Inventorship (Legal)



- AIは発明者になれない。
- 人間が「創作的寄与」を行った証跡（プロンプトのログ等）を保存・管理する。

結論：人間とAIの共生による知財実務の未来



**生成AI活用は「時短」のためだけではない。
特許の質的向上とイノベーション加速のための
戦略的アクションである。**



AI: 定型作業・網羅的探索



Human: 戦略的判断・信頼関係・ビジネス価値への翻訳

**プロンプトエンジニアリングは必須のコアコンピタンス。
新たな知性を使いこなし、第4世代の知財戦略をリードせよ。**